

委員会報告

表紙写真の選考を終えて

学会誌企画・編集委員会

学会誌第89巻の表紙写真を募集(テーマ:農業(水利)施設・構造物とそれらに支えられた農地・地域の景観など:現代の最新技術と苦労が垣間見える造形美・用の美など,2020年9月30日締切)したところ,33点の応募がありました。11月2日に審査委員会(委員長・柳本尚規東京造形大学名誉教授)を開催し,12点を選定したので,ここに報告します。

学会誌企画・編集委員会では,学会誌第90巻(2022年発行)も皆さまからの応募写真で表紙を飾ることとし,表紙写真を募集しています。

募集の趣旨および応募方法の詳細は,本誌会告(72ページ)をご覧ください。たくさんのご応募をお待ちしております。

講評

柳本 尚規(東京造形大学名誉教授)

気がつくともうフィルムは売っていない。ないことはないが,手に入れるにはいくつかのルートに限られてきた。値段も高い。カメラ離れも激しいようだ。フィルムカメラ離れは当然としてもデジタルカメラも同様だ。スマートフォンで事足りる,というよりもそちらの方が使いやすいからだということらしい。それにつれてプリンターを持つ人もすっかり少なくなってしまった。紙にして送配するのではなく通信波に乗せて送ればいいのだからそうになってしまう。そういう世相下,写真を見る目,写真に望む目も変わってきている。

たとえば私も,写真を見るに際しての〈いい写真〉観がずいぶん変わってきたと思う。どんな写真も想像のきっかけとして自分本位に楽しんで見るようになって

きているように思うのだし,その意味では〈作者〉の存在をあまり気にしなくなってきた。私に限らず多くの人もそう感じるのなら,やがて写真の質はそういう見られ方に応じたものへと変わっていくことだろう。

応募写真の数々を拝見して,心遣いと言えるようなささやかな健気さから壮大な挑戦と言える試みまで,今と昔を往来しながらあらためて私は自然という場に生きる人々の奮闘を思わせられた。そしてもっともこのストーリーを読みたい,自分の中に編んでみたいと思うようになった。

このときに思ったことが,先に書いた写真の質が変化することへの期待である。それは若い人たち,変化と同時進行している人たちの感覚によってこそもたらされるものかもしれない。〈シェアの送信〉感覚で撮られた写真,そこにはどんな共感への期待が込められているのかを想像するのも楽しいだろうと思っている。

第 89 巻表紙写真入選作品

1 号



夕日に映える西国東干拓地
(渡邊圭四郎)

時間の旅— 1日に2回ある潮の満ち引きは春と秋に大きくなる。年間を通じて海水温が一番低くなる3月ごろには海水の体積が小さくなり、潮位が最も低くなる。干潮時には潮が大きく引いて干潟が現れ、潮干狩りの時期になる。だから干潟、潮干狩りは歌の春の季語になっている。季語は時候や天文、行事や植物など9項目に分類されていて春の干潟は地理のカテゴリーに入る。天文と並んでもっとも人の手の及ばない天地の理の範疇である。〈季語〉はかなり科学的だ。

干潟が発達するには条件があって、その多くが波の影響を受けにくい入り江とか湾内、そして砂や泥を運んでくる河川の河口域というところ。泥の海と考えれば干拓や埋め立てには格好な土地だ。だから高度経済成長期には全国の干潟が4割も減った。

干潟にはさまざまな栄養物質が堆積するので多様な生物群が生息し渡り鳥も飛来する。そのためにも干潟は線につながるネットワークのようになっていなければならないと日本自然保護協会は発信する。乾燥した陸地と海の緩衝地帯としてもその意義が再認識されて、いまはまたその保全運動の気運も高い。

万葉の時代にも干潟を詠んだ多くの歌が残されている。

若の浦に 潮満ち来れば 潟を無み
葦辺をさして 鶴鳴き渡る

山部赤人

これは和歌山の紀ノ川河口に逗留した歌人の歌だが、海のなかった奈良の貴族は好んで和歌浦に遊んだといい、潮の干潮風景にあこがれた気持ちが偲ばれる。

周防灘に臨む大分国東半島の真玉の干拓地を写したこの写真は、手つかずのかつての海岸域と人がつくった形がいまぜになって遠い時間から今に至るまでの、時間の旅のような感慨をさそってくる。私たちは、こういう不確かで二度と同じ形を見せないのだが悠然としてある自然にじつに引きつけられるものだ。

2 号



農地への架け橋 (幸田和久)

新たに知ること— グラフ誌「LIFE」の出現が写真の時代の到来を決定づけたといわれる。1936年のことだ。創刊号には社主のヘンリー・ルイスが、「どこにでも行く、知らないもの、行ったことのないところへ、本誌は皆さんに代わって行って見てくる、そして報告します」と高らかに宣言した。世界中の多くの人が自分の国を出て外国に旅することなど望むべくもなかった時代だ。「LIFE」は「代理体験」という言葉も生み、写真を見た体験がじっさいの体験と混じり合う意識の時代をももたらした。

エチオピアの谷に架かる橋のこの写真を見たとき、私はすぐにこのグラフ誌を思い浮かべた。そしてグラフ誌の写真を見る人たちの中におこる未見のものを知る気持ちのざわめきを想像した。

私たちが風景写真を見るときは多くは「既視感」に抱っている。自分が見たものとの比較がその基準だ。しかしこの写真には比較する記憶が浮かんでこない。それが写真を見る楽しさなのだ。

谷に架かる一本の吊り橋。撮影者の説明によれば、水食によって形成されたV字谷に分断された高原の農地を結ぶ貴重な農道橋、とある。農地へアクセスする貴重な通路なのである。

Google Earthで“地球儀”を回して近づいていくと、エリトリアにも近いエチオピア北部、海（紅海）からも遠く隔てられたティグライ州の中心は谷に分断された高原にあり、その北に平らな農地が広がっている、ということが分かる。このことから、写真の農道橋の理由が分かる。この橋を渡り農地との往來をする人たちの日々もまた目に浮かんでくる。

日本の農地は静かなので見るものはつい自然の豊かさに心をまませるものだが、エチオピアの農地への道である「ティグライ州の橋」は、農業のあるところには形こそ違えすべて自然への挑戦、そこから生じる人の静い、そういう影が幾層にも潜んでいるのだと覚えておくべきなのだろう。

3 号



水神の御許みのり育む名蔵ダム
(木村健一郎)

自由な想像— 日本の神話では山の神が重要な役回りをしている。それを起源とするのだろうか、「山の神」は俗語として今に及んでもよく使われる。箱根駅伝では実況アナウンサーの必須語で山を走り上げる強い走者の指示代名詞だ。下りの走者へのそうした代名詞がないのは不思議だが、いずれにしる強いという意味が山の神の真髓の一つであり、その部分が転じて妻の異称としても定着している。山の神は時々荒れるからというのも妻の異称のゆえんらしいが、とにかく山の神は人々の営みにおいて崇めなければならないものの総称ではある。

神が宿る山の多くは高山である。しかし写真の名蔵ダムにまつわる神がすむ山、於茂登岳は高くない。といっても沖縄では最高峰だという。標高526m。東京郊外の高尾山でさえ599m。その於茂登岳の神は山岳信仰の神とは違った「山の神様」と呼ばれるのにふさわしいナルンガーラという〈水の神様〉だというのだから素敵だ。

石垣島はずっと於茂登岳から流れる山水によって農業を頼んできた。その山水を配してくれる水の神様ナルンガーラ（於茂登御主神）に祈願をする風習が続いていて、写真のダムができた後も展望台横に神様の座は移設されてダムを見守っているという。

ダムは、1971年の半年以上連続して雨が降らなかった干ばつで大きな打撃を受けたことをきっかけに造られることになった。干ばつは農業ばかりではなく牧草をも奪って畜産業を痛めつけた。

念願のダムの姿は山の神の配下にはいささか不釣り合いなほど、端正、シンプルにすっきりとした造りだ。ここに水を溜め置けば、という気持ちが伝わってくる。

“異境”を少しも強調することのないこの写真は淡泊に見える。だがその視線が私たちの自由な想像を遊ばせる。写真の質によって、私たちの遊び方（想像・学び方）も変わってくる。

4号



先人の偉業を称える五郎兵衛用水
(才川知利)

人の記憶—川沿いや貯水設備など水場のそばにはなぜ桜が多いのか、という話題はよくある。そのおさらいをすればいつもこうなる。——始まりは新田開発が盛んになった江戸時代にさかのぼり、川が氾濫して土手が決壊する打撃が相次いで、その対策として桜の植樹が広まった。というのも桜の根はしっかりとしているので土手を補強する上で役に立つ、そしてまた花見客が訪れて土手が踏み固められて土壌強化に貢献するから、と。

いまなお、たとえば東京では隅田川沿いや目黒川沿いの花見が風物詩になっているが、土手の強化策から始まって川の流れやため池周りの春の桜はセットとなって私たちの原風景となったのである。原風景といわれるものの多くは、手つかずの自然をいうのではなく何らかの利を得るために改造されてきた自然の姿だといってもいいだろう。

長野の佐久地方に流れる五郎兵衛用水は、かつて武田家に仕えていた家系を引く市川五郎兵衛が徳川家康から領地を預けられて、用水がない佐久地域の新田開発を目的として建設されたものだといふ。

蓼科山中の湧き水を水源として、トンネルを穿ち、台地と台地の間の低地には盛土をして水路をかき上げし、川の上を渡す掛樋もつくって険しい地形に広く水を配したのだという。荒れ果てた草原は一望の水田地帯になった、という歴史だ。

私たちはこの20 kmにも及ぶ用水路がどのように維持管理されてきたかということにも想像を巡らせなければならぬかもしれない。五郎兵衛が私財をなげうってという個人の美談で済ませられる話ではない。春には落ち葉を取り除き破損箇所を修復する普請および管理する普請に加え、夏の「小破繕い」もあわせ、年間を通じて7,000人ほどの人力、すなわち、隣村も合わせて1軒当たり35人ほどの人足を出さなければまかなえなかったというのだから、一体どうやって農民の生活は成り立っていたのかも不思議に思える。整備されて、桜を愛でながら流れる用水路のように見えるこの写真を見つめていると、いまに続く用水の歴史と携わった人々の顔のさまざまな目が浮かんでくるようだ。

5号



丘陵地の皿池改修工事 (近田昌樹)

想像の余白—砂浜で時間をかけて積み上げて作った城もどきの造作が、潮が満ちるときの小さな波に跡形もなく連れ去られた記憶は誰にだっているだろう。

ため池の改修工事を行っているこの写真を目にしたときによぎったのが、いま書いたような記憶とともに砂上の楼閣ということわざである。いや、ため池がそうだということではなく、しっかりとしたため池をつくるのがいかに難しいことか、現代の土木技術をもってしてもそうなのだから昔の工事ではどんなに大変なことだったろうかと思うから、土の強さと脆さをあらためて考えさせられるのである。

近年の気象は山を崩し造成地を崩し土手をも決壊させる豪雨がしょっちゅうだ。コンクリートで固められているから心配など無縁だと思われた市街地の地面にも突然穴が開き、覗くと土の層が崩落している。そんな具合に土の脆さを目の当たりにすることがいまは多い。

写真にうつる舗装路は耐性の低い土への対処法としてつくられた工事用の仮設道路だ。そして微妙な傾斜角度の盛土。そして水が流れていく開放口の緩やかな下り。築造から150年以上も経っているので老朽化が進み、池の下方に開けた集落への危険も想定されることから改修工事が始まった写真のため池は愛媛県松山市の南、皿ヶ峰の近く下林地区にある。

山が急に下ってあたりに扇状地を成したので棚田が美しい一帯だ。その棚田を潤すためのため池がいくつもつくられてきた。今は鳥になったような気分で上空からの眺望もコンピューターを通じて確かめることができる。そういう俯瞰の機会は、ため池の必然性は一見にしかずとばかりの理解をもたらす。そして老朽化といってもそれはたんに古くなったということばかりではなく、堤を成す土の中の成分(微生物)に変化があって堤の質を変えつつあるのかもしれないという想像ももたらす。コンピューターの画像を広げて一帯を見れば生物の進化同様、人の生活とともに大地・自然もまた新しいものへと変化・進化するものなのかもしれないと思う。この工事サイトの写真にはシンプルなものにいろいろ想像する余白がある。

6号



再整備途上の一ノ井堰 (脇谷芳招)

共生観の視線—かつてはどこでも、街中でだって用水路を見かけた。散歩、そぞろ歩きの格好な場所でもあったはずだ。旅に出て、用水脇の草むらに座って缶ビールを飲み、サイコーの気分を味わった思い出も数多くある。そんなときの水音、吹いていた風や匂い、日射しの感じが〈風景〉という概念の重要な中身になっているかもしれない。日本に水は豊かだと思っている。その原景、私の頭の中の豊かな水は水田に取り入れられる水の姿で、農業の広がりとともに作られてきたものだったのかなと思うほどだ。

ヨーロッパ各地のような多様な地形のあるところでは風車によって取水・排水を行う装置技術も発達して動力によって水をくみ上げ用水路に流す農地も多いが、日本では自然流下の水が田畑を潤してきたという先入観がある。しかしその思い込みはひとえに山と海の間が近かった、その山も急峻で流れを散らさなければ氾濫する、そこから川を分け水を広げていくので水の風景が多くなった、という事情によるものだったのではないかな……。その事情がそのまま私たちの風景観の源泉になっているように思う。

写真の洛西地域の用水の柱である桂川も氾濫の多い川だ。近年もしばしば豪雨と氾濫、橋の流失などの姿を目の当たりにする。治水目的も重視した用水路改修が急がれているようだが、写真の穏やかな水音ばかりが涼しげに聞こえてくるような世界からは想像ができない。そのギャップの記憶もまた私たちの風景観の内容である。

そよとした風とさんさんと注ぐ日射し、台風の豪雨と奔流、そして水の中に点々と残る家屋の姿。私たちの風景観の多くが農業の姿と切り離せないものであるとすれば、それは美しい田園風景、それからもたらす水のさまざまな姿・状況も透かし見る内容になっているだろう。自然の静かさも氾濫などの恐ろしさも、農業を通じて実感してきたのだといえるだろう。だからこの穏やかな写真は、急に転換する場面も同時に想像させる。その源は私たちの中に棲む、自然との共生観にあるのかもしれない。

7号



津波被災農地における圃場整備
「右田・海老地区」

(福島県)

自然への畏怖— 奥州三関の一つといわれてきたいわき市の南端、勿来の関から始まって塩屋崎の先、薄磯を通り、浪江の請戸、相馬市の松川浦あたりまでの東北海岸線は、夏になれば海水浴と海浜キャンプのメッカで、その一つ一つがどこも大賑わいだった。そして砂浜が広いのが特徴であり、そして遠くには何かしらの発電所の煙突が見えるのも特有のロケーション。それが震災と津波によってすっかりなくなってしまったという写真を見たときには驚いた。砂浜の再建はできない。薄磯の再開を除けば、一帯の多くは人工海岸化が進むばかりだ。海水浴場はどこも広々としてシーズンの盛りでも人混みにはならず、よしず張りの出店が並んでスピーカーからはいつも風で強弱がムラになった歌声が聞こえたものだが、いまは写真のように変わった。

海に一番近い風が抜けるところには風力発電のタワーが並び、ブレードが回る。そして空からの日射しを受けとめる太陽光発電のパネル畑。そして野菜や稲作に乗り出す農地へと続く。がらっとつぎの幕場に進んだ舞台装置のような変わりようだ。

水平線、海岸線、田んぼと、直線ではないものといえは空に浮かぶ雲だけである。農地の大区画化、汎用化、用水路のパイプライン化、そして再生エネルギー用地の創出と、津波被災地における復旧復興のモデル地区。このたくさんの目的を見ると、この場所がそれだけ多様な自然の面が生み出す現象によって営まれていたことが分かる。モデル地区はそのことを痛いほど想像させてくる。

しかしモデルは想定したものをしか体現できないが、自然は状況次第でますます姿形を変えていくだろう。整然とした写真の景観は、最先端の知見の誇りと同時に、自然に対しては手の届かない可能性への畏怖感も漂わせているように見える。

8号



村の分水工 (北川 孝)

希望の伝達— 地下を流れる農業用水を地上に噴き出す方式の「分水工」はまるで小さな滝のようだ。この分水工を中心にした親水公園が各所にある町内にはいつも水の音が聞こえている。鯉がゆったりと泳ぐ緩やかな流れの用水路、流れの方向を変える分岐工あたりの速まる流れ、そしてまたゆったりと広い稲田の中を流れていく用水路だらけの街から水音が途絶えることがない。写真の分水工も、近づけば飛沫が霧となって夏なら絶好の涼み場所だ。しかしそれはいかにこの地が水を大切にしなければならなかったか、というよりその貴重な授かり物をいかに等しく争いなく共有するかに長い歳月をかけてきたかの歴史を想像させる象徴でもある。

琵琶湖の東部にあって彦根にも近い甲良町には犬上川が流れ、ここから取水する灌漑水路が早くから彦根藩の米作りを支えてきた。しかし広い湖東平野に水を供給するのは難しい。洪水と早ばつの繰り返しの歴史も長く、水利を巡る激しい争いも度々だったろう。だから戦後の高度経済成長期をむかえ農業基盤を整備するに当たって、町は水利の平等な分配と受益をもたらすことを前提に、農業用水とまちの景観作り、つまり新しい生活環境の価値観作りにもけて広く検討を重ねた。結果、それは各町内の水扱いの創意を競うことになり、まちづくりにおける住民参加の意識を高めることとともに水流音がいつも聞こえるまち並みの出現をもたらすことになったわけだ。

豊かな水の存在を知り、それによってもたらされる今日を知らされ、そしていかに水をあまねく引くことに時間がかかったかを忘れないようにと、まちの歴史を目の当たりにするシンボルとしての分水工の姿。「力耕招福」と刻まれた石を頂上においたこの分水工のシンボル、水流の山は、希望を託して各地にある「富士塚」信仰のたとえにも似ているように見える。

主題を中央に配してアップにした写真は、作者がそこに込めた寓意を強調する。見るものはその寓意を読む。作者はどういう気持ちで対象から持たされたかを想像するのだが、この写真もその楽しみを与えてくれる。

9号



大地を潤す東方大丸太鼓橋 (田口 保)

たくさんの不思議— こういう石橋の写真を見るたびに、どんな工事をしたのだろう、と思う。

以前ならたいていの家にはあった大工道具一式のようなものをまだ持っているという人は、親の家を継いだような人を除けばとても少ない。ドライバーの各種を持っている人さえ少なくなった。釘を打ったり、鋸をひいたり、そんな柵板一枚を造作することもなくなってしまったいま、この石橋を見て現実から離れたファンタジーに触れた思いで無邪気な感動がかき立てられるとしたら残念なことだ。

ローマ帝国における大事業の始まりは水道の敷設だったといわれる。そこで必要になるのがアーチ橋だ。その技術はどこに起源するか。紀元前のメソポタミアの墓や神跡にはレンガの尖頭型アーチが残っていて、おそらくそれが発祥の形だといわれる。そこから現在のイタリアにあった古代国家エトルリアに渡り、そしてローマに伝えられたのではないかと。フィレンツェの南東にあるトスカナの端のエトルリアの首都ボルテッラの入り口には、たしかに石のアーチがある。そこを通らなければ集落には入れないというしるしである。だが石橋アーチ橋建設の技術がそこから始まったとしてもそれがどんな風に日本に渡来したのか……。鎖国時代の貿易港、長崎に伝わったポルトガルからの伝説が有力だそうだが。

江戸時代の終わりごろ、新田開発のためにつくられた宮崎県小林市の浜ノ瀬川に架かる写真の石橋も苔むして美しい。その美しさは私たちにたくさんの不思議感を誘うからだ。利にかかっている精密な工学技術に拠ったものだからこそ美しいと感じるのだが、その技術にまで想像を及ぼせられないで終わるのが少し情けない。いかに私(たち)の体験や知識と諸技術との乖離が激しいものになってしまっているのかと考えさせられてしまう。そんなことを思いながらこのケレンのない写真に私は長く見とれた。

10号



水理シミュレーションを経て拡張され、安定したパッファ(調整)機能を発揮する「宮川内調整池」(本條忠應)

語りの始まり— 何かの実験場を思わせる静かに整然としてある施設の写真は、テレビに見られるドキュメンタリーのファーストシーンに似ている。これから展開するストーリーを視聴者に予感させ準備させる象徴的なシーン、である。

水の流量を調整する装置だと知っても、それならもっと素朴な仕掛けだってたくさんあるのと思うが、この川が吉野川の施設だと教えられると「ああ、あの吉野川」とばかり四国4県をまたがる四国一の大河、それも利根川(坂東太郎)、筑後川(筑紫次郎)と並ぶ日本三大暴れ川、四国三郎という異名をつけられていたほどの大河かという想像がわく。その気むずかしい川をなだめて有効に使うための施設だろうかという想像がわかされるのである。

吉野川の源は高知県の、林野庁が選定した「水源の森百選」の一つ「吉野川源流の森」として選定された石鏡国定公園の指定区域内にある。山脈の中心となる石鏡山は、山岳信仰の山として知られ、ここも「日本百名山」の一つになっている。そういうところにルーツを持つ吉野川は異名のごとくしばしば洪水を起こし、一方では大きな水不足をもたらしてきた。とりわけ水不足に悩まされてきたのが瀬戸内海側で、その対策として計画されたのが吉野川北岸の整備だった。吉野川北岸用水の事業である。早明浦ダムを水源として池田ダムから農業用水を自然取水して、水田用水を安定的に供給する事業だった。その北岸用水の幹線用水路は池田ダムの上流に池田取水口としてある。総延長は約70 km。その上流側60 km近くがトンネル・暗渠で、下流側がパイプライン。写真の宮川内調整池はそのパイプラインの始点となる。調整池は文字通り上流からの流れをコントロールして下流域への水量・水位を管理する。しかしつくられた頃から時間が経って、農業が多様化し水の需要にも大きな変化が生じてコントロール方法も見直さなければならなくなった。調整池の拡張と新設、水位調整ゲートの整備等の改良である。

調整池のストーリーが以上のように展開する。ドキュメンタリーをつくる時にはきつと水源や流域、そして今日の農業が描かれるに違いない。それらを知ってこの調整池の立場が分かる。写真は動画と違って一つのシーンをしか見せられないから不便だと思うだろうが、見るものに動画を作らせる力がある。

11号



水田の暗渠排水(岩田幸良)

大地の呼吸— 長靴の形をして南北にのびるイタリアで、国中でワインがつくられているのは、原料となるブドウ栽培が盛んだからだろう。温暖で日照量も多く、ブドウ栽培には理想的な環境だということだ。それでも各地のそれぞれの環境の違いからさまざまに独自の品種が発展し、そこから多様なワインが生まれることになる。さらにこの多様性は各地の伝統的な料理に合わせたもたらされているのだと聞くと、いうまでもなくそのそもその各地のブドウが、環境に任せきりで栽培されているはずはない。「山の麓」という意味の名を持つピエモンテ州はイタリア西北部、トリノを州都に持つ地域だが、この山の中で親子三代にわたってブドウ栽培を続けている農家の日々を知るテレビ番組があった。いま跡を継いでいる長男が「ここはいつさい自然任せのブドウ畑だ」と自慢する。「そのために収穫量は劣るけれど年々の気候変化にも翻弄されない、祖父が一人で地中にパイプを埋めておいてくれたからだ。水と空気の栄養が畑の土を育てているからだ」と。傾斜でうねるブドウ畑はほかの農家のブドウ畑ほど見た目には華麗ではない。しかしそれを見て私は一人でコツコツとパイプを埋めて土壌の改良を目指した「祖父」の思いを想像して感動した。

これからつくる暗渠管用の疎水材の入った袋が並んだ刈取りの終わった田んぼの写真を見て、私はこのテレビの画面を思い起こしたのだが、写真をよく見ると端の方には排水路の窪みも見える。疎水材の袋はその窪みから直角に列を成して並んでいる。溝を掘り下地を整えたらパイプを置き、その上に疎水材となるモミ殻をたっぷりと被せていくのだろう。水はけに加え土中の酸素が増えて微生物も活性化する。

まさにイタリアのアルプスの麓の傾斜地でブドウ畑を造りあげた発想の知恵と同じものを所を変えて見ている思いだ。土に育つすべてのものの勢いを引き出すための暗渠パイプはさながら人の体の血管のような役割だろう。結局またそこへ行き着く。大地の活性を企むなら人体模型を想像すれば良い、という生命の仕組みの基本である。そう思うと、写真のモミ殻袋がこれから身体、いや大地に吸い込んでもらう葉のカプセルのように見えてくる。

12号



入江干拓地区(北川 孝)

土地の由来— 琵琶湖の東、米原市の西端に位置する写真の地域は干拓によったところだ。かつてあった入江内湖は、比較のたとえでよく使われるディズニーランドの6倍ほどの広さ、300 haほどのもの。では秋田の八郎潟はどれくらいだったかと確かめるとそこは17,000 ha余。いかに八郎潟が大きいかと思ひ、八郎潟へ初めて行ったときのそれまでに見たことのないまったく異彩を放つ景色に驚かされたときのことを思い浮かべた。

比べると写真の入江干拓地区とある景観はずっと以前からあった場所、と感じるほどに時の歴史にもとけ込んでいる。馴染んでいると感じる。埋め立てられる前の入江内湖は船を使った交通路、および鰻・鮎・鯉・鮒・シジミ等の漁業を中心に利用されていたが、食糧増産を目的として干拓化された。漁場としても使われていたというから、その日常生活とともにあった歴史の流れの延長線上にあるように見えて異彩感がないのだろう。

写真の承水路も干拓地に特有な施設としてではなく、ずっと前から変わらず流れている川のように見える。海を陸にしたような八郎潟に比べ入江内湖の干拓地のようなところは少なくないのだと思う。隣接する湖などに連動して陸域化と水域化を繰り返してきたとか、水深も深くはなかつ湖底も平坦であったりすれば水田化する計画も考えやすい。そうして新たな景観に変わったところは都市郊外の住宅建設地の開発同様、各地に多くあるのだと思う。

しかしそれでも「昔」は残る。というか、昔を消すことはできない。再開発がピークにある東京・渋谷の駅そばの大きな交差点は、信号を待つたびにここが相当な窪地であったことを誰にも想像させるのである。八郎潟もそこがかつて限りなく海に近いところだったことを吹く風の質が感じさせる。そういう名残りを探索する小さな旅のブームは、私たちがいつも自分の由来を知りたい気持ちを持っていること、アイデンティティーを持ちたいと思っていることの証ではないか。

平穏なときを切り取ったこの写真は、水が流れる用水路が写っていることによって〈時間〉を象徴する図像になった。